

研究報告

養護教諭一種免許履修における ロール・プレイング導入のための研究会参加報告

留目 宏美¹⁾ 廣瀬 清人²⁾

A Participatory Report on Summer Workshop Held by the Role-Playing Association for Examination of Role-Playing Introduction in Curriculum Concerning the First-Class Yogo Teachers' Certificate

Hiromi TODOME, RN, PHN, MSN¹⁾ Kiyoto HIROSE, PhD²⁾

[Abstract]

In April of 2006 St. Luke's College of Nursing began a curriculum, in which students will qualify for the first-class Yogo teachers'(school-nurse teacher) certificate which signifies the higher level. Consequently, 15 students will graduate, eligible for the certificate, by the end of this fiscal year. Keeping this in mind, in April of 2009 a new notification from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology(MESST) was issued. According to the notification, we were required to teach a method of role-playing or field work in the curriculum for the first-class Yogo teachers' certificate to efficiently improve both students' social and human relationship skills. To comply with this MESST's policy, the authors participated in Chiba's Role-Playing Association summer workshop. Hence the purpose of this study is to report our participation in the workshop, and to suggest how to include role-playing in the Yogo Instruction curriculum.

According to the Chiba's Role-Playing Association, this type of role-playing is a psychological group therapy technique based on Moreno's psychodrama theory: a teacher serves as the student's auxiliary ego, expressing surplus reality of the pupil. When we use this method, it is thought that students effectively acquire both social and human relationship skills such as empathy. Because of this, we strongly suggest that we introduce this particular role-playing methodology into our curriculum not only for the practice teaching seminar, but also for the pre-and-post student teaching for Yogo teachers.

[Key words] the first-class Yogo teachers' certificate, curriculum concerning the first-class Yogo teachers' certificate, training education, role-playing, Chiba Role-Playing Association

[要 旨]

2006年4月、本学における養護教諭一種養成大学としての教育が始動し、今年度は初めての卒業生を輩出する年である。ところで、2009年4月、養護教諭一種養成機関のカリキュラム内容に関する新たな通知が文部科学省から出された。その内容は、社会性や対人関係能力、あるいは保健室経営などの学生の資質能力を高めることをねらいとして、ロール・プレイングやフィールドワークを追加することが盛り込まれた。そこで、本研究の目的はこの通達に沿って、千葉ロール・プレイング研究会に参加した内容の報告と、今後の方向性を考察することである。

千葉ロール・プレイング研究会によれば、ロール・プレイングは広義のアクション・メソッドの一つを

1) 聖路加看護大学 地域看護学 St. Luke's College of Nursing, Community Health Nursing

2) 聖路加看護大学 心理学 St. Luke's College of Nursing, Psychology

意味し、モレノのサイコドラマ理論を援用している。この方法は、教師は脇役（補助自我）であり、生徒が主役となった技法である。この方法は、教師のより適切な指導・支援のあり方を検討し習得するのに効果的であると考えられる。したがって、教職実践演習だけにとどまらず、学内における養護実習事前・事後指導においても、ロール・プレイングの活用を積極的に検討することを提案したい。

〔キーワード〕 養護教諭一種免許状、養護教諭一種に関する履修、養成教育、ロール・プレイング、千葉ロール・プレイング研究会

I. はじめに

わが国において、養護教諭一種免許状取得可能な課程認定大学は年々増加傾向にあり、2009年4月時点で101校にのぼる。その内訳は、教育学系、看護学系、健康・スポーツ科学系、家政・栄養学系と学問的背景が多様であることから、日本養護教諭養成大学協議会では、よりよい養護教諭養成に向けた養成大学同士の協働の必要性を声高に叫び、養成制度ならびに教育課程の検討に関する委員会を立ち上げ、活動を展開している¹⁾。

本学における養護教諭一種免許に関する養成教育の充実を図ることにより、学生の確実な資質能力の定着を図り、社会的要請に十分応えられる養護教諭を育成する必要がある。したがって、本稿では養護教諭一種免許に関する履修における教育方法・内容の一つとして、ロール・プレイング（役割演技、以下RPと略記）導入を検討した。

II. 研究目的・方法

本研究は、養護教諭一種免許に関する履修のうち、特に養護実習における教育方法・内容の一つとして、千葉RP研究会において実践されているRPの導入を検討することを目的とするものである。そこで、本大学における養護教諭一種免許に関する履修、特に養護実習の現状と課題を明らかにするとともに、千葉RP研究会への参加体験をもとに、RPの意義ならびにその導入に関する有用性を考察した。千葉RP研究会参加体験の報告に関する倫理的配慮については、同研究会会長・副会長に同意を得るとともに、参加者個人が特定されないような記述を行った。

III. 本学における養護教諭一種免許に関する概要

1. 教員免許状の区分

教員免許状は、専修免許状、一種免許状、二種免許状の3区分からなり、これらは学位の違いを表している。一種免許状は学士、二種免許状は準学士を意味する。これらの免許状の区分による業務制限等の規定はないが、

教員は一種免許状の取得に努める義務を有している。

したがって、本学において、養護教諭一種免許に関する履修を始動させたことは社会的意義が大きいと考えられる。

2. 履修科目

本学では養護教諭一種免許に関する履修に対応し、2006年4月より必要な科目が開講された。履修科目は表のとおりである²⁾。養護や教職に関する科目に加え、一種免許状取得の必修単位としての教養科目がある。

3. 養護実習

養護実習は、事前・事後指導1単位分を含む養護実習5単位から構成される。実習時期は4年次前期であり、2009年度履修学生は15名であった。養護実習は履修における最終科目であり、養護教諭としての資質と実践力の基礎を養うことを目標とした。

1) 事前指導

養護実習事前指導の一つとして、けがや体調不良を訴え、保健室に来室する児童生徒への対応ならびに保健指導・保健教育に関する基本的な知識・技術の習得を図るという目的のもと、2つの演習を実施した。概略は以下のとおりであった。

(1) けがや体調不良を訴える児童生徒への対応

この演習は、事例体験によるグループ検討ならびに全体発表・討議をするものであった。事例は、保健室での対応頻度の多い鼻出血、創傷、骨折・捻挫、熱中症の4種類を用いた。履修学生からは「養護教諭に関する学び」「養護実習のイメージの具現化」「自らの課題の明確化」に関する意義が多く述べられた。

(2) 保健に関連する模擬授業の展開

この演習は、教職に関する科目「教育課程論」で作成した模擬授業を評価し、改善した授業を再度、模擬的に展開するものであった。演習当日までに、指標に基づいた評価内容を反映させた指導案を作成することを事前の課題とした。授業評価に焦点を当てた演習プロセスを踏んだことで、履修学生からは「授業評価に関する学び」「授業の進め方や指導方法に関する学び」「自らの課題の明確化」に関する意義が多く述べられた。

表 養護教諭一種免許取得に必要な履修科目と単位数

1 年次		2 年次		3 年次		4 年次	
教育原理	2	教育制度論	2	学校保健	2	教育課程論	2
教育方法の研究	2	カウンセリング概論	2			道德及び特別活動論	2
法学*	2	教職概論	2			生徒指導論	2
体育 I	1	教職総合ゼミ	2			養護概説	2
体育 II *	1	英語表現法 II-S	1			養護実習 I・II	5
英語表現法 I-S	1	英語表現法 II-S	1			(事前・事後指導 1 単位を含む)	
英語表現法 I-W	1						
情報処理演習	2						

*：2年次でも履修可

2) 事後指導

養護実習事後指導は全体発表会を行った。臨地における養護実習は各実習校につき一人の実習であるため、各学生の経験や学びを共有することによる再考察を促した。

4. 教職実践演習に関する文部科学省からの通知

2008年11月、文部科学省初等中等教育局より「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」が公布された。この省令の主な事項の一つとして「教職実践演習」を必修科目として新設し、2009年4月1日からの施行が義務付けられることとなった。

教職実践演習は、学生が習得した資質能力が有機的に統合・形成されたかどうかを最終確認する科目であり、いわば全学年を通じた学びの軌跡の集大成とされている。将来教員になる上での自己課題を明確に自覚し、不足している知識や技能を補い、その定着を図ることで、円滑な教職生活につながる科目と位置づけられ、原則4年次後期に開講する科目である。教員に求められる「使命感や責任感、教育的愛情」「社会性や対人関係能力」「幼児児童生徒理解や学級経営等」「教科・保育内容等の指導力」の4事項の能力を目標・評価指標とし、講義・グループ討議の他、RPや事例研究、フィールドワーク、実務実習、教材研究や模擬授業の実施が示された。さらに、養護教諭の場合、職務に応じて専門的な内容を適宜追加することも指摘された。

5. 養護実習における RP の導入に向けて

いじめや不登校、性の逸脱行動、喫煙・飲酒・薬物乱用、特別支援教育など多様かつ複雑な課題を抱えている昨今の教育界を鑑みると、教員の資質能力の向上ならびに養成教育に対する期待が高まり、養成教育における履修内容の段階的なレベルアップが求められる。したがって、養護実習のさらなる充実を図り、そのあり方を積極的に検討する必要がある。事前・事後指導における教育方法・内容の一つとして RP の導入実施を検討したい。

IV. RP の実施に関する検討

1. RP とは何か

1) 位置づけ

まず、RP は心理学的な観点からすると、どのような位置づけになるのでしょうか。集団という観点から行動を検討する立場は、集団心理療法と集団力動に大別できる。前者の観点から初めて検討したのは Moreno, J. で、後者は Lewin, K. とされている。結論を先にいうと、RP は集団心理療法の下位分類である心理劇のサブカテゴリーに位置づけられる。

2) RP とロールプレイの比較検討

一般的に RP とロールプレイは区別なく用いられていることが多いが、しっかり区別する必要がある。まずロールプレイはどのような技法なのであるか。

『集団精神療法の基礎用語』のなかで、ロールプレイは次の説明を与えられている³⁾。「ロールプレイはまず、患者の希望に即した具体的な対人的場面を設定したドライランを行うことから始まる。ドライラン後、患者に正のフィードバック、次いでコレクティブ・フィードバックを行う。必要があれば、改善点を取り入れたモデリングによる観察学習を行った後、すぐ新しい行動のリハーサルを行う」

他方、RP は具体的な対人的場面における特定の行動の定着を目的としていない。わが国でもっとも数多く RP を実践してきた西村は、RP を心理劇の教育領域での実践ととらえ、次の定義を与えている⁴⁾。「RP は、集団や個人における人間関係上の問題について自発的に役割を演じながら、新しく見直していく役割学習である」

このように RP とロールプレイの定義を比較すると、後者の観点を取り入れることには大きな意義があることが分かる。

2. RP の基本

まず、RP を実施する際の基本的な事柄に関して、先行研究をもとに簡単にまとめておきたい⁵⁾⁻⁸⁾。

1) 手順

(1) ウォーミングアップ

ウォーミングアップには十分時間をかけることが難しい場合があるかもしれないが、短時間でも実施する必要がある。ウォーミングアップには身体・行為的な方法と言語的な方法がある。数多くのウォーミングアップが考案されており、具体的には『SSTウォーミングアップ活動集』などの書籍を参考にしていきたい⁹⁾。

(2) 実演

この部分がRPの主要段階である。大枠の技法はロールプレイと似通っているが、RPの特徴は演者の心的な問題に焦点をあてるところにある。RPを福祉現場で実践してきた伊東は「虐待の母親への指導のあり方」「夏休みの生活リズムの乱れをどう考えるか」「朝、起きられない子どもにどう働きかけたらよいか」などの興味深い例を実演している⁹⁾。これについては以下の参加報告で詳述する。

(3) 終結

終結について、川幡¹⁰⁾は「演者が自分自身を演じ、自分自身の言葉で語ったときに終わりになるが、現実には、そうしたRPはほとんど起こらないから、適当なところで演技を中断し、討論に移る。この討論をもとに新たな場面を設定し、演者に役割を与え、ドラマを演じさせる」と述べている。一般的に、終結の際には参加者全員でのシェアリング、デローリングを順番に行う。

2) 5つの構成要素

演じられたドラマが心理劇と呼べるためには、5つの構成要素を満足させなければならない。RPの場合には、それらの要素のうちのいくつかが欠ける場合があるが、その場合でも、構成要素とドラマとの対応については、十分理解しておかなければならない。

(1) 監督 (director)

RPでは援助者のことを監督と呼ぶ。その役割は「ドラマを中断してその推移について解釈を与えたり、観衆の討議を司会したり、援助の具体的な方法の選択をし、補助自我を活用する」こととされている。養護教諭の実践の場合には、養護教諭自身がこの役割を担う。

(2) 主役 (protagonist)

RPでは、参加者の話し合いの中から、ある人が話した話題を取り上げて検討することが多い。一般的には、監督が話し合いの内容を聞きながらテーマを決定するが、言い出した人が主役をつとめることが多い。主役は中心的な役割を演じ、RPの中断後は演じたうえで感想を述べる。養護教諭の実践の場合、この主役はつねに幼児児童生徒である。

(3) 補助自我 (auxiliary ego)

これは心理劇固有の役割である。監督と主役を結びつける役割を演じ、問題をもった対象者がある役割を演じるとき、その相手役となって、当該の対象者の意図や願

望がよく表現されるように援助する役割である。養護教諭の実践の場合には、養護教諭は監督であると同時に補助自我の役割をとり、主役となつてはいけない。教育場面でのRPにおいては、この点はきわめて重要と思われる。

(4) 観客 (audience)

監督・主役・補助自我以外の参加者を観客と呼ぶ。観客はドラマを見て、中断後の討議に加わる。観客はドラマを他人事として漫然と見るのではなく、ドラマを心的な象徴として見なければならない。この意味において、ドラマは観客のものともいえる。養護教諭が保健室で実践する場合には、観客はいないことが多い。

(5) 舞台 (stage)

Morenoの心理劇では、物理的に舞台は特別な装置であるが、一般的に行われるRPでは、ドラマを演じる場が参加者にとって単なる物理的な場とは異なり、参加者にとって、特別に安全な場所であることを了解してもらえばよい。養護教諭の実践の場合には、保健室が舞台になる。つい立てを利用するのも効果的であろう。

3) 基本技法：役割交換法、鏡映法、二重自我法

PRの基本技法には、①役割交換法 (role reversal)、②鏡映法 (mirror technique)、③二重自我法 (double technique) の3種類がある。とくに重要なのは役割交換法である。これは、たとえば、母親が子どもの役割をとり、子どもが母親の役割をとるというような役割を交換する技法である。これによって、ドラマのなかで、実際に相手の立場にたって行動し、演者が実感をもってはつきりと相手の気持ちを感じ取ることを目的にしている。その他の技法については、たとえば、三浦¹¹⁾を参考にしていきたい。

V. 千葉 RP 研究会参加報告

1. 千葉 RP 研究会

ここまで紹介したRPを最も精力的に検討している研究会の一つに千葉RP研究会がある。同会は事務局を千葉大学教育学部附属小学校におき、横浜市立大学教授外林大作、千葉大学教授時田光人（いずれも当時、敬称略）の指導のもと、教育場面においてRPを検討し続けてきた。歴史的には、1964年以降、宿泊を伴った夏期講習会を45年間、また月例研究会を1968年9月以降300回以上継続し、数多くの実践を蓄積している。筆者らは同会に入会し、夏期講習会と月例会を経験した。

2. 研究会参加体験

研究会におけるセッションの実際について、以下に記述する。

ウォーミングアップの段階で、一人の女性参加者から

次のような話題が出された。中学3年生の息子が年齢相応でない幼稚なちょっかいを出してくる。息子は特に理由を語ることもなく、自分の背後にそっと近づき、突然首や肩を触るという行動を繰り返すという趣旨の内容であり、自分は息子の行動をどのように理解し、対応すれば良いのか分からないという。参加者の同意のもと、監督はこのテーマを取り上げることにした。設定は中学校から帰宅した息子と夕食を作る母の場面、演者は話題提供者である女性参加者が息子役、他の参加者が母役を担い、同場面の実演と解釈を4回、2時間かけて行った。

1) RPの実演と解釈(1回目)

(1) 実演

母：あら、おかえり。早かったね。

息子：ただいま。(母の背後に近寄り首を触り、離れる)

母：(息子の方に振り向いて)何?どうしたの?

息子：別に。

母：そう。もう御飯だからね。早く着替えてきなさい。

息子：ああ。(母の背後に近寄り肩を触り、離れる)

母：(息子の方を振り向いて)何?おなかすいたの?

パンでも食べておきなさい。

息子：ああ。(再度母の背後に近寄り首を触り、離れる)

母：(調理の手を止めて振り返り、息子に近寄り)何、どうしたの?

息子：別に。(後ずさりをし、離れる)

(2) 解釈

監督は実演を中断し、演者に感想を求めた。息子は「ちょっかいを出すと、母が笑顔なので自分も楽しかった。最後に、母が自分に正面から近寄ってきたときにドキッとして思わず後ずさりしてしまった。自分からちょっかいを出しているのだが、母とはある程度の距離を保ちたい」、母は「ちょっかいを出してくる息子が可愛くて仕方がない。もっと息子に関わりたいたいという気持ちだった」と語った。

当初、息子のちょっかいは何度も繰り返され、日常の和やかなやり取りがRPにて再現された。ただし、最後に母が息子に近寄った途端に、息子は硬い表情に一変し、後ずさりをしたことから、母と話をしたいとか母にかまってほしいという単純な思いだけではないと考えられた。演者や観客らからの感想を踏まえ、監督は、母が意識的に息子と向き合い、次場면을演じるよう、演者に促した。

2) RPの実演と解釈(2回目)

(1) 実演

息子：ただいま。

母：おかえり。今、あなたの好きなビーフシチュー作ってるからね。

息子：ああ。(母の背後に近寄り首を触り、離れ、椅子に座る)

母：どうしたの?(椅子に座る) なんだか疲れてい

るみたいね。

息子：うーん、そうかな。

母：学校はどうだった?

息子：別に変わらない。

(中略)

母：今度、買い物と一緒にいこうか。洋服を買いに行こう。好きなのを買ってあげるよ。

息子：いやだよ、何で母さんと一緒に買い物なんか。もう中学3年だよ。

母：そう?いいじゃない。昔は、手をつないで一緒に買い物に行ってたじゃない。

息子：昔の話だろ。今、一緒に行くわけがないだろ。

(その場を立ち去る)

(2) 解釈

監督は実演を中断し、演者に感想を求めた。息子は「母に正面から向き合われてしまうとなぜか無性に不安を感じる。一緒に買い物に行こうと言われた時には、自分に近寄ってこようとする母に苛立ち、無意識にその場を立ち去ってしまった」、母は「やはり息子が可愛くて仕方がないので、一緒にいたいと思った。息子との会話を楽しんでいた」と語った。その後、監督は観客一人ひとりに感想を求めた。観客からは「息子が可愛くて仕方がないという母の思いは、現実の息子を見ているようで、実はすべてを保護してきた幼かった息子の面影を見ているのではないか」「母は、息子に対する万能感を持ち続けていると思う」などと語られた。観客からの感想を踏まえ、監督は再度演者に感想を語るように促した。母は「ちょっかいを出されたことで幼い頃の息子を想起していたかもしれない。ちょっかいを出す息子がいとおしかった。私なりに息子に気を遣って会話をしているつもりだったが、今振り返ると、自分が主導権を握り、自分の思いをぶつけ、支配的な会話をしていた」、息子は「母が距離感を無視して、身体的にも心理的にも自分に近づいてこようとするので、自分が脅かされるような怖さを感じた。会話は母の質問に答えるだけだったので楽だった」と語った。監督はさらに観客に感想を求めた。観客は「息子は母と向き合うことから逃げている」「息子のちょっかいは母を気にかけている故の気遣いかもしれない。成長に伴って生じる母との距離を息子なりに埋めるためのきっかけを作っているのではないか」「互いのバランスが取れていない現状で、適度な距離を保つことは困難だ」と語った。

当場面では、母は息子と向き合い話をしていった。そのやりとりは一見会話に見えるが、相互にベクトルを向けたやり取りではなかった。母は自分の思いを息子に示すのみであり、その本質は自己中心的かつ一方的なもので、関係性における主役は母であった。息子はそんな母の万能感に不安を抱き、逃避したのかもしれない。したがっ

て、監督は、互いに適度な距離感を保つことを意識して次場面を展開するよう、演者に促した。

3) RP の実演と解釈 (3 回目)

(1) 実演

息子：ただいま。(椅子に座る)

母：おかえり。私も一息つこうかな(椅子に座り、雑誌を読み出す)

息子：何、読んでるの？

母：パッチワークの本。習おうかなと思って。あなたの勉強、邪魔しちゃいけないし。

息子：ふーん。習えばいいんじゃない。

(中略)

母：そういえば、夏休みの塾はどうする？

息子：どうするって。どうせ、塾に通ってほしいんだろ？

母：そんなこと言ってないよ。自分で決めればいいよ。

息子：そうは言いつつ、実は塾に通って、良い高校に入ってもらいたいと思ってるんだろ。

母：そんなこと言ってないでしょ。自分で決めなさい。担任の先生は何て言ってるの？

息子：担任は何も言ってないけど、どうして急に担任の話になるんだよ。

母：先生がどう考えているのか大切でしょ。そろそろ、お父さん帰ってくる頃かしら。

(2) 解釈

監督は実演を中断し、演者に感想を求めた。息子は「今までの実演で感じた不安や怖さから、今回はちょっかいを出せなかった。今回の実演内で新たに不安や怖さを感じることはなく、母が自分に気を遣っているように感じた。塾に通うかどうか決めかねているからこそ母に相談したかったが、担任教師や父の話題を突然出し、やり取りから逃げているように感じた」、母は「自分なりに息子に気を遣ったつもりだ。自分の考えを押し付けてはいけなそうと思い、担任教師や父の話題を出すことで私の思いを伝えることを避けたのは事実だ」と語った。監督は観客一人一人に感想を求めた。観客から「今回は息子が主導権を握った会話だったので、息子の居心地が良かったのではないかと。足を投げ出し、椅子に寄りかかり、ゆったりと椅子に座っていたように感じた」と語られた。監督はこれについて息子に感想を求めた。息子は「母の気遣いを感じて心地よかった。母の動揺が手に取るように分かり、面白くもあり苛立ちもあった」と語った。

従前とは異なり、息子は今回はじめて母と向き合おうとする姿勢を語った。実演と解釈を重ねることにより、主役が息子へと変わりつつあった。監督は、母が息子の思いを充足させるように次場面を展開するよう、演者に促した。

4) RP の実演と解釈 (4 回目)

(1) 実演

(前略)

母：今日はテストだったよね。昨日、遅くまで勉強してたけど、どうだった？

息子：俺が昨日の夜勉強してたの、知ってたんだ。

母：もちろんじゃない。我が息子ながら、頑張ってるなって思ってたよ。

息子：まあ、俺なりに頑張ったけどさ、点数はあんまり…。

母：難しかったんだね。頑張ったのに、悔しいね。

息子：うん、難しかった。でも、勉強不足だったから。

母：勉強不足だったのね。(中略) 母さんも勉強手伝ってあげようか？

息子：母さん、俺に勉強教えられるの？

母：全部教えられるかは自信ないけど、もちろん手伝うことはできるよ。

(2) 解釈

監督は実演を中断し、演者に感想を求めた。息子は「今回は素直に話ができた。きちんと話もできたし、ちょっかいを出そうとも思わなかった」、母は「自分の思いも伝えながら、息子の話にも耳を傾け、話をするように心がけた」と語った。その後、監督は観客一人一人に感想を求めた。「これまでちょっかいを出していた息子は自分自身を見つめずにその場をごまかしてきたのではないかと。今回は母の言葉をきっかけに自分と向き合い、結果的に母と向き合うことができたのだろう」と語った観客がいた。

今回のやり取りでは、息子が主役となり、息子の思いや願望を言葉にして問いかける母が息子の補助自我として機能していた。息子の思いを充足することにもつながり、相互に満足のいくコミュニケーションが図られた。

5) セッションを通しての考察

話題提供者である女性参加者(演者：息子役)は、実演と解釈を通して、客観的に自己内省を深めた。セッションを通して、現実における息子との関係を深める契機となり、観客もまた子どもとの対話について自らの教育活動や日常生活を振り返る機会となった。4回にわたる実演と解釈に関する内容の変化は、図に示すとおりである。

VI. 千葉 RP 研究会参加体験の意義

一般的な RP の目的は、自己・他者理解、カウンセリングスキル習得、問題解決の事例検討とされている。しかし、千葉 RP 研究会における RP の目的はそれだけに留まらず、学校教育における RP を中心として、教師や保護者が行う RP を学ぶこと、つまり RP における監督および補助自我役割のあり方を検討することを目的の一つとしている。金子¹²⁾によれば、養護教諭が保健室で行う個別な RP は、養護教諭が監督と児童生徒(主役)

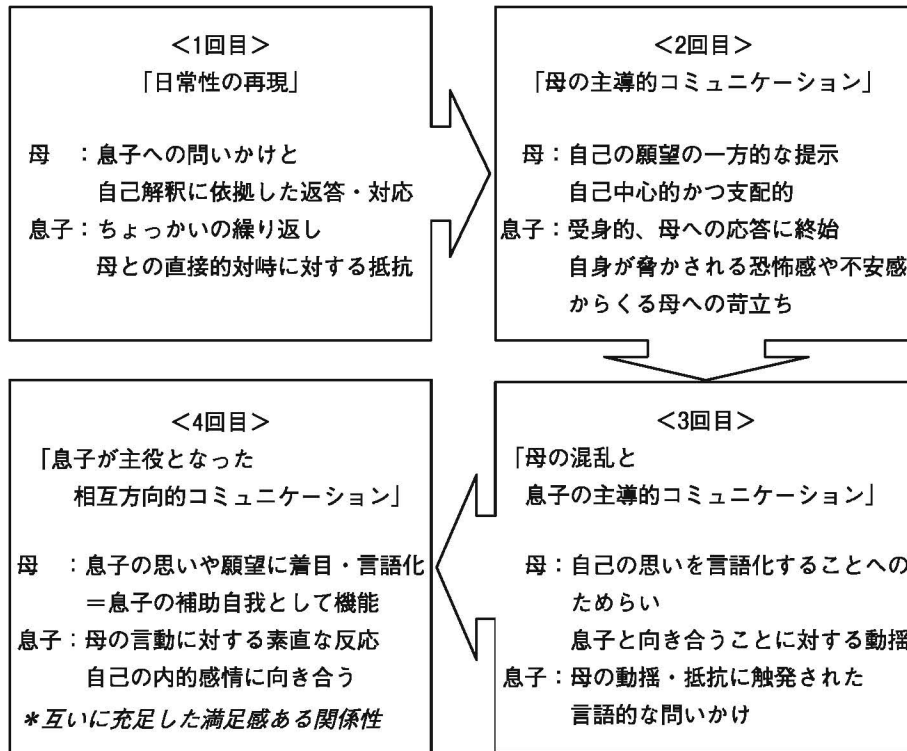


図 4 回にわたる実演と解釈の内容の変化

の補助自我を兼ね、原則的に観客はいないことを特徴としている。そして、保健室に来室した児童生徒が RP の主役をしていく過程を通して、そこに示される自らの心理的世界を察知し、悩み解決の手立てを自ら見出せるよう工夫していかなければならず、多分に治療教育的要素を RP の中に取り入れることが養護教諭の重要な役割であろうと述べている。

養護教諭の役割・機能の一つとして健康相談活動（ヘルスカウンセリング）が挙げられ、子どもとの対話による心の解放とそれに伴う自己表現に対する受容と共感が期待されている。さらに、子どもが背後に抱えている感情の自己理解を効果的に促すこと、子どもが対自己・対他者と誠実に向き合うことを支えること、子ども自身が効果的な課題解決の方向性を見出す契機を作り、課題解決力を育み養うことが健康相談活動における養護教諭の重要な実践力である。学校教育の理念である幼児児童生徒の生きる力の育成の一翼を担い、十人十色の幼児児童生徒一人一人との対峙・対話が存在意義の根幹である養護教諭だからこそ、一つの技法として RP が有効であり、効果的な RP を実践する力が鍵となる。学生は、養成教育終了時点で養護教諭としての基本的実践力を確実に定着することが求められている今、本学における養護教諭一種免許に関する履修において、学生が RP 実践の基礎を習得できることを目指したい。そして、養護教諭として児童生徒と向き合う際に、幼児児童生徒を主役にし、自身が監督ならびに補助自我を担う対応を学び、その資

質能力を養うことを目指したい。したがって、履修における教育方法・内容として、4年次の履修科目を連動的に捉え、段階的に RP を導入し、学内における学びの機会の充実を図っていかなければならない。特に、養護実習に臨む学生の実習生役割は当初主役から始まるといっても過言ではないことから、養護実習事前指導における RP 導入が最も重要であろう。養護実習において児童生徒との実際の対話を図る前に、学内演習において RP における余剰現実を体験することにより、学生は養護教諭としての望ましい役割に気付くことが可能となり、主役からの脱却ならびに児童生徒の補助自我役割を目指すという効果的な役割変化が期待できる。学生の役割変化の過程は、先述した研究会参加体験におけるセッションの進行に応じて、母親役割が主役から補助自我へと変化を遂げた事実に対応するものであり、児童生徒と構築する関係性において、養護教諭としての役割行動の方向性を示唆するものと推察される。

ここで、本学における養護教諭一種免許に関する履修に RP を導入する有意義性を以下に特記したい。まず第 1 に、学生自身の自己中心性による日常的な一方的役割を体験的に内省することができる。演者のみならず観客もまた演者を鏡にして自らの姿を内省でき、全員が主役になれる。第 2 に、学生が子ども役を演じることにより、教師や保護者の一方的役割に対する子どもの受けとめ方や感じ方・反応を体験的に理解でき、養護教諭として児童生徒と対峙・対話する際の態度や姿勢を検討できる。

第3に、学生が自身の心理的葛藤に直面することの重要性を理解できる。心理的葛藤の自己否定は自己中心性に縛られた一方的役割演技を続けることを意味し、相対する子どももまた自分と向き合うことから目を背け、表面的な言葉や行動への固執へとつながり、相互の適切な対話を図ることが困難になる。それを体験的に理解できる。第4に、養護教諭として、RPを行う際の監督役割ならびに子どもの補助自我役割を学ぶことができる。

Ⅶ. おわりに

本学における養護教諭一種免許に関する履修の充実を図る目的で、本稿では、本大学における養護教諭一種免許に関する履修、特に養護実習の現状と課題を明らかにするとともに、千葉 RP 研究会への参加体験をもとに、RP の意義ならびにその導入に関する有用性を考察した。学生の実践力の基礎を養うという目的のもと、RP は教職実践演習のみならず、養護実習事前・事後指導における教育方法・内容の一つとして段階的導入を積極的に検討する意義はあると考えられる。したがって、RP において重要な機能を持つ監督役割のあり方、RP 実施時の担当教員の関わり方など具体的な方法論を、さらに検討しなければならない。また、RP を用いることによる学生の資質能力の水準向上の有効性について明らかにすることを今後の研究課題とし、社会的要請に十分応えられる養護教諭の育成に寄与していきたい。

謝 辞

本稿の執筆に際し、千葉 RP 研究会会長 伊藤鉄夫先生、同副会長 西村正司先生ほか、同会の会員のみな

まに多くのご示唆をいただきました。記して感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 日本養護教諭養成大学協議会事務局. (2008). 日本養護教諭養成大学協議会事業活動報告書 (2005~2007年度). 日本養護教諭養成大学協議会
- 2) 聖路加看護大学. (2009). 2009年度授業科目概要 (シラバス I).
- 3) 大野孝浩. (2003). ロールプレイ. 日本集団精神療法学会. 94. 金剛出版.
- 4) 西村正司. (2005). サイコドラマの教育領域での実践. 現代のエスプリ. 459. 55-67.
- 5) 石井哲夫, 時田光人. (1974). 心理劇の理論と技術. 日本文化科学社.
- 6) 伊東正裕. (2008). 福祉現場のロール・プレイング. 久美株式会社.
- 7) 台利夫. (2003). 新訂ロールプレイング. 日本文化科学社.
- 8) 武藤安子. (1993). 発達臨床: 人間関係の領野から. 建帛社.
- 9) 前田ケイ. (1999). SST ウォーミングアップ活動集. 金剛出版.
- 10) 川幡政道. (2000). ロール・プレイングのはじめ方・おわり方. 5(1). 1-8.
- 11) 三浦幸子. (1993). 子どもの臨床心理劇. 武藤安子編著, 発達臨床—人間関係の領野から, 建帛社. 109-137.
- 12) 金子賢. (1992). 教師のためのロールプレイング入門. 86-94. 学事出版.